

詩 追憶のカイロ（11回）

とよださなえ

カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんの今月の掲載詩は、ご主人の任期が終わり、一家でカイロを引き上げる際の、子守さんとの印象的なやり取りを描いたものです。恐らく、とよださんの詩集の中で、最も苦渋に満ちた一編ではないでしょうか。

日本人だけでなく、発展途上国に家族を伴って赴任する際には、ほとんどの家庭ではお手伝いさんを雇用します。それは風俗習慣も異なる地域で安全に無事に暮らすために、外国人の家庭には家事補助者が必要となるからですが、一家が幼い子供たちを伴っている場合は、特に子守が必要となるのです。外国人の家庭で働く家事補助者や子守は独自の横の連携を持っていて、公園、幼稚園、学校などの詳細な事情から、それぞれが働く家庭の「マダム」の情報を、まるで老練なスパイのように把握しているのです。そのような環境下であっても、子守とマダムが互いに信頼し合うことができるなら、外国での暮らしは安泰となり豊かな思い出の多いものとなります。文化も習慣も異なるところでは、なかなか難しい話です。

3年半の赴任期間中、最後まで同じ家事補助者たちを雇用し続けたとよださんの努力と忍耐がどれほどのものだったか、この詩から、小さい歯ぎしりの音が聞こえてくるような気持ちがするのは、私だけではないと思います。

数年後にカイロへ出張されたご主人が「ファトマに会いたい」と探したが、彼女はすでに高血圧か糖尿病かで亡くなっていました。とよだ家の人々が心の奥ではファトマさんを慕っていたことが読み取れるエピソードです。

なお、とよださんの詩の中にみられる言葉で、今日では差別語として用いられなくなったものがいくつかあり、とよださんに、それらの訂正を許可していただきました。（塩尻和子）

子守のファトマ

ファトマが亮介を抱きしめ
半開きの鎧戸の
窓辺に立ちつくしていた

重く深い沈黙の影
ナイル川に朝もやが漂い
埃もまだ気配を消している
透明な夜明け

別れの朝だったから
見なれた砂漠の稜線や空
ピラミッドに
さよならの挨拶をしたけれど
三年半一緒にいても
見たことのないファトマの影に会い
部屋を通りすぎた

ファトマのフルネームを知らない
ファトマは私の名前を知らない
『マダム』
ファトマは読み書きができなかつたし
ファトマがさし出す証明書の
アラビア文字を私は読めない

十三歳で嫁し 美人の多い国柄の中で
怪奇な面相の黒い 歯っかけ五十女
遅刻して出勤し すぐ疲れたといって
横になる高血圧の大きな身体
ばれても 嘘を言い張る心臓
物盗りをする手
物乞いに答えれば 農婦みたいに折る腰
一人息子も嫁も蹴とばす気性
トランジスター・ラジオをはなさず
ニュースを聞く耳
外国人の家で働く女中仲間を取り締まり
対米 対英 対日作戦を指南する頭
嫡男の亮介にだけポンポンを与える
割れ目に出来た力を摘む
対日作戦
掃除 洗濯が駄目でも
首にならないと私を読んだ目

イスラエリ！ といって
サンダルでゴキブリをたたいた

いたずらな目は カクテルのエッセンスで
新参の主 イエローヤンキーの
お手並み拝見という挑戦の目がベイス
カクテルの名は
貧乏 被支配 被害者意識

アメリカくたばれ！
と 合唱していたのが
サダトの演説のあおりで
ソヴィエトくたばれと歌詞が変わり
配給も行列も物乞いも変わらない時
被害者めいた顔が 一番の防御
その仮面の観客はマダム
甘ったれるな！
日本で
飢えと隣あった
配給も行列も知っている

イエローヤンキーの私は
エジプトをファトマに見つづけた

朝日が昇り
二人に少しづつ光が動くと
やさしさに抱かれ
黒い影が小さくなっていく
ファトマの大きな胸に
着替えのすんだ亮介が
頭をうずめている
別れは 祈り

いつもながらの
コックの作る朝食
亮介と別れの儀式をすませたファトマは
娘の亜理にも愛想よくテーブルの世話をする
何気なく 何気なく
人々が食堂に入りし
出発の時を知らされる

亮介の手をつないだ私
フェンスをはさんで

ファトマが向こうにいる
見送りの人々がひしめく中
身をのりだし
リョウスカーと叫ぶ顔は
生き別れになる母親そのもの

一飛びすれば
カイロの街は
砂漠の中の一点になり
ナイル川は黒い一本の木綿糸
さようなら
ファトマ